

「火」が心に与える力

人の心や家族として生活に与えてきたもの

産業革命と
アダム・スミスと火打ち石

一七九〇、七一年間、研究調査の仕事でロンドン市内の行政機関を訪問する機会が多くなった。あるとき国会議事堂の近くで、アダム・スミス研究所という表札が目に残った。この研究所が、あの『国富論』を著したアダム・スミス（一七二三—一七九〇）とどのような関係があるのかは定かではないが、金属板の表札を埋め込んである建物の壁に装飾してあるのは、断面が乳灰白色の火打ち石（フリント）であった（写真1）。

産業革命は、これまでの小さな手工業的な作業場に代わって、機械設備による大工業が成立し、産業の技術的基礎が一変し、これとともに社会構造が根本的に変化する。産業革命を経て初めて近代資本主義経済が確立。一七六〇

吉長 成恭

Written by
Haruyuki Yoshinaga

年代のイギリスに始まり、一八三〇年代以降、欧州諸国に波及した（広辞苑第五版）。

家内工業、手工業的な作業場の火と大工業の火とは、物理的にも精神的にも存在感が違う。近代資本主義の成立と原始的な火打ち石とは、両極に位置するように感じるが、この表札を見ていると、火が人に与えてきた意味を示すものが、何か意図されてここに埋め込まれているような気がしてならない。

国民経済の最小単位である家計から煙が消えていくことと、火打ち石を必要としなくなった近代資本主義の成立で失ったものが、どこかで繋がっているのではないか。ロンドンの街角でこのような発見をしたことは、世界で最も早く産業革命を果たした英国から学ぶべきことが、夏目漱石の明治時代においても、それから百年を経た現在でもたくさんあるのではないかと気がさせられる。



【写真1】アダム・スミス研究所の表札とプリント

世話をしないと
火はどこへ行くのか？

このごろ家の中を見渡しても、火の気がない。火事の災難にならないから、それはそれで家内安全でよいかも知れないが、なんとなく寂しい。昭和の時代になうて、家庭における火の居場所は大きく変化した。もちろん火が全くなくなつたわけではない。火の気がなくなつたのだ。心のどこかで暖炉や薪ストーブなど生の火、つまり炎が恋しい。家の中に操ることができる火が存在することは豊かさの象徴でもある。

人間の周りには、自らも含めて動物や植物、鉱物などたくさんの物質がある。火は酸素を必要とするが動物ではない。火は植物でも鉱物でもない。万物の中で、火はなんとという属、どんな系に位置づけられるのだろうか？ サントリーのテレビ広告ではないが、人の活力は、燃焼系、燃焼系、アミノ式「かもしれないが、これは半分冗談の引用としても、人間のエネルギー代謝と同様、火は燃料・酸素・熱の複合的な要素で成り立つ、燃焼という現象であり、反応である。人々が家族の大事な一員として家の中に持ち込む前は本来、火は地球のどこに生息していたのであろうか？

その答えは自然現象として山火事の発火の例が示すように、火は人々の制御に甘んじるまでは、大地に生息していたとすべきである。完全燃焼の結果である水の中に火は存在しないのと同様、自然の火は海洋に存在せず、大地に生

息する。もしも人間が火の世話をしなくなると、火は自然界に戻るのだらう。つまり野性に戻るのだ。

制御によつて火は 人の心の中へ

人間は野生の火を制御することで火に適応してきた。制御の技術を磨くと同時に、心の中の火の存在に、火との深い絆を自覚した。火よちて人間は文明を拓き文化を築いてきた。人間がネズミのような小さな動物だったら、火を燃やしてもすぐに消えてしまう。ゾウのように大きかつたとしたら、野火や山火事の心配のない焚き火場がなかなかみつからない。と、池澤夏樹氏の『母なる自然のおっぱい』の中の、人間の身体の大きさが火を扱うのに十分なほどの大きさであることの説は、妙に納得する。われわれの身体は、火を制御することが可能な大きさであり、火の科学性を探索することが大脳の発達を促してきた。そして、火の制御こそ、人間が他者と区別されるときに異論を挟む必要がなくなつた。

人々は燃料の準備、点火の支度、火の維持、火の利用、火の番、火の始末、灰の利用など、火の一生、つまり火の生老病死をケアし、あるいは必要ときに甦えらせることもできる。火を世話する間われわれは、火によつて癒される。フランスの思想家ガストン・バニユールは、「火というものは、間違いなく人間によつての最初のオブジェで

あり、最初の現象であり、火において人間の精神が反映されているのである」と述べ、さらに燃える火を前にしての瞑想こそが、人間の最初にして最も人間的な、火の使用法だと言及している。人間にとつて火の最初の用途は、暖をとつたり、明かりを灯したり、あるいは煮炊きするといった物理的機能を利用することのみならず、火に精神を反映させたことであり、それが霊長類としての進化を極めることにつながつたのではなからうか。もう一度、『人々が火の世話をしなければ火はどこへ行くのか？』、この自問に、われわれは、文明的側面と精神的側面から火とわれわれの生活の関係を考える必要がある。

われわれの心の中に火は宿っている。鴨長明は方丈の庵でふと目が覚めてしまったときには、灰の中の埋め火をかき出し、火を目覚めさせ老いの寢覚めの友とした。ウォールデン湖畔の山小屋で森の生活をしたH・D・ソロウの相棒も石で築いた炉辺の火であつた。自分で熾した火に向かい合つた夜、火はソロウの創造力を駆り立てたに違いない。ヘルマン・ヘッセの落ち葉焚きは作務であり、孫と一緒に庭仕事と焚き火は愛であつた。

焚き火の基礎を確認してみよう。(一)割れた木のほうが丸太よりも焚き火に適している。

(二)火には空気が必要である。(三)火が燃えているところに隙間をあげなさい。風が通りやすいように。(四)炎は上へ上がる。炎は細く高く作りなさい。炎は薪の表面に沿って上がる。(五)最初の火はすく尽きる。(六)炎は沸かすことと焼くことに、熾は炙つたり揚げ物をしたりするときに。堅木や炭の重い火は安定した熱を得る

ために。(七)やわらかい木は香りとパチパチする音を楽しむために。(八)火は最低限度の大きさでなるべく小さく保ちなさい。(九)最初の炎の熱を保ちなさい。(十)焚き火をする前に必要な薪のすべてを用意しなさい。(十一)必要以上の焚き火をすべきではない。(十二)炎は自分の心を反映する。

焚き火の基礎は日々の生活すべてに当てはまり、人はいかに生きるべきかに言及しているように思えてならない。火が人の心の正面に存在して与えるものの意味がここに伝わる。

生活の中の火の神様

われわれの生活の中には、多くの火の神様が祀られている。竈の神様は台所にあつた。竈分けは、大きな家族から小さな家族が分化していくこと、つまり分家を意味している。そのときの竈の火は、単に調理という火の基本的機能だけが分かれるのではなく、家風、家族の暖かさと一緒に新しい家族に引き継がれていく。そこで、新しい竈の火は、これまでと同じ火の形で燃えるが、燃えているものはいつも新しいのである。マラデーが「ロウソクの科学」で述べているように、炎はいつも同じだが、燃えているものは、絶えず新しい状態で保たれている。

日本の野鍛冶屋さんには、鞆の神様と一緒に火の神様が祀られている(写真2)。インドネシアのバリ島マヌ村。ここは木彫の民芸品で有名な

あり、彫刻刀を作っている。ここでも村の鍛冶屋さんには真つ赤に塗られたヒンズー教の火の神様が鎮座している(写真3・4)。

影絵芝居ワヤンはスクリーンの裏側で炎の揺らぎを巧みに利用し、リズムカルで透明感のある美



【写真2】鍛冶屋の神棚



【写真3】鍛冶屋の彫刻刀作火(バリ島)

しい音色と語り口で始まる。これは、寺院の祭礼のみならず個人の冠婚葬祭の儀礼においても上演される。火の基礎的な機能の一つに照明があるが、明るく照らされた部分のみならず影の意味を火はわれわれに文字通り暗示する(写真5)。



【写真4】鍛冶屋の火の神様(バリ島)



【写真5】影絵芝居ワヤン(バリ島)

大阪の道修町や東京の日本橋本町には、田畑を耕して百草を嘗めその効能の教えを、市を開いて広めたとされる薬の神様、香具師の神様である神農さんが祀ってある。神農は炎帝と呼ばれる。市は神社の境内で開かれることが多かったので、ときや用語には「サクラ」「トハ」「鳩」、「テツカリ」「照明器具」など神社にまつわる業界用語が多い。炎帝神農が人々の健康のために、薬草の効果を庶民に知らせる広告・宣伝のため



【写真6】とんど(広島市)

恵が、市場を作り、商業を育て、経済を発展させた。そんな歴史の中にも火は生活の傍に登場する。

分割された火と 世代を繋ぐ火

もう一度、家の中を見渡してみよう。熱はある。光もある。現代では火の

エネルギーは分割されて存在している。照明、採暖、調理、乾燥など火の基本的機能が分割されていくうちに、ゆらゆらと揺らめく炎をじつと見る機会は、生活の中から姿を消していった。火の気はなくなる。科学の発達で火は使いやすく分割され、安全で便利になった。

しかし、分割された火が人々の心に与える意味と本来の姿の火がもたらす精神的力は異なる。火は五感を通して心に近づき、共振させる。情動や感性そのものの状態を映し出すのである。そして、火が人に与える心理的意味は、用途として分割されていない不便な火によってこそ、そして人が火の世話をすることで、内観と表

象の機会を得ることができるところにある。

火が家の中から姿を消してしまつた。しかし、世話をしなくなつた火は野生に帰つたわけではない。人々の智慧で、火はコミュニティの中で燃えている。

「とんど」あるいは「どんと」は、旧正月に竹を主な燃材として作られる。「とんど」の勢いよく舞い上がる炎、竹の弾ける大きな音に、旧年の感謝と無病息災、家内安全、学業成就、子供の成長の願いを乗せて祈る(写真6)。

確かに、家の中で素朴な火を見る機会がなくなつた。しかし、火はコミュニティで大事にされ甦る。聖なる火を神事として行われる祭礼が全国津々浦々に残っている。そこには世代間の絆を確かめあふ火がある。統合的な火の造形を人々は求め、火は人々の心を紡いでいる。

科学や技術と袂(たもと)を分かたれる前のART(芸術)は、HEART(HE「神様の芸術」心)、水つまりHを後ろに動かすとEARTH(地球)、もうひとつ水を前につけるとHEARTH(炉辺、家庭)のすべてに宿っている。

吉長 成恭(よしなが・なるゆき)

広島国際大学大学院教授、日本焚火学会代表世話人。一九五二年広島出身。広島大学大学院博士後期課程修了。医学博士。広島大学医学部助手などを経て現職。平成一〇年カーディングチームで脚光を浴びている園芸療法を始め、啓発書『園芸福祉のすすめ』(創森社)を刊行。著書は『焚き火大全』(共著・創森社)など。